



4/1(水)18:30-東海教会
8(水)18:30-小田川
15(水)18:30-天王学院 (会場の)
22(水)18:30-東海

ハイドンうんちくで欠かせない「交響曲の父」ネタ見つけたのでご紹介

(2025年2月19日 投稿者: blog staff (木山舞子音楽教室ブログより))

フランツ・ヨーゼフ・ハイドン (Franz Joseph Haydn, 1732年3月31日-1809年5月31日、オーストリア・ローラウ) は「交響曲の父」と呼ばれますが、なぜでしょう。

音楽家を「～の父」と称するニックネームで呼ぶことは多くみられ、音楽界最高の称号と思われる「音楽の父」と言えば、ヨハン・セバスチャン・バッハを指し、同時代に活躍したヘンデルは「音楽の母」と呼ばれます。(父と母の違いって何!?) ラデッキー行進曲で有名なヨハン・シュトラウス1世は「ワルツの父」と呼ばれ、その長男で美しき青きドナウの作曲者ヨハン・シュトラウス2世は「ワルツ王」と呼ばれます。

そんな中「交響曲の父」ハイドン。ハイドンが交響曲という形式を初めて生み出したわけではなく、交響曲という形式で作曲した先駆者が彼より前に存在したのに、なぜ彼が「交響曲の父」と呼ばれるのか。

ハイドンは1761年の30歳手前で、ハンガリーの大富豪エステルハーザ家に仕えることになり、以後30年の長きに渡って、理解ある庇護のもとでオーケストラ音楽を追求する道が拓けました。日常の職務としては生活の中で活用される音楽、言わば機会音楽を作曲し供給することであり、その中心的な哲学として「調和がとれていること」「聴きやすいこと」が求められました。貴族の形式化された日常の中で、余暇として楽しむ音楽を作ることを期待され、ハイドンは見事なまでに職人技でそれに応えたと言われています。まさに、職人仕事として作曲した「交響曲」も、番号が付いているものだけでも104曲も量産し、古典派以降の作曲家の中で断トツの数を誇ります。最初の頃はどうしても類型化するのを避けられず、どれも同じように聴こえますが、50番台を過ぎあたりから、標準的な楽章構成も固定し、明朗で明快で爽やかというハイドンらしさに溢れた曲が多くなります。

そうしたハイドンらしさが生まれたのは、交響曲を4つの楽章から組み立て、各楽章それぞれに特有な性格を与え、その型式を厳密に守ったことに由来すると思われます。具体的には、以下の構成です。

第一楽章：テンポはアレグロでソナタ形式 第二楽章：テンポはアンダンテで三部形式

第三楽章：テンポはアレグレットでメヌエット 第四楽章：テンポはアレグロでソナタ形式

こうした形式は言葉のない交響曲のような長丁場の器楽曲を最後まで聴き通すための「杖」とも「地図」ともなり、音楽に安心して心をゆだねることができ、飽きずに聴くことができるようになりました。このような楽章の音楽的性格付けと形式が完了した時、交響曲は魅力あふれた将来性のある楽曲としてはじめてその地位を決定的に確立したと言えます。それを成し遂げたのがハイドンですから、ハイドンを「交響曲の父」と呼ぶのがふさわしいでしょう。

と、ここで、このブログは終わってるのですが、その後のことを Wikipedia「交響曲」から引用。

ハイドンの後、ベートーヴェンが、第3楽章に使われていたメヌエットをスケルツォに変え、古典派の交響曲の形式、を完成させる。そのうえ、ベートーヴェンは第5番(運命)では第3楽章と第4楽章を続けて演奏。第6番「田園」では楽章の数を5つにし、第3から第5楽章までを繋げて演奏。交響曲第9番では終楽章で独唱と合唱、そして複数の打楽器を新たに取り入れ、さらに緩徐楽章とスケルツォの順番を逆にするなどの斬新な手法で、古典派における交響曲の頂点に達した。

4月29日は練習後に懇親会します～。会場（港近隣）近く！

旨手羽屋朝潮橋店 17時～ 3500円飲み放題コース(^^)

- メニュー（予定）
- ・特製塩たれ使用の食べ放題キャベツ・本日のサラダ
 - ・串焼き盛り合わせ3種・ジャンボだし巻き・旨手羽揚げ
 - ・鶏のから揚げ・大盛フライドポテト・本日のご飯もの

30人前後で貸切にしてもらえます！亀井先生もご参加くださいます！

団行事の懇親会は、この1回のみ（あとは本番後の打上パーティ）奮ってご参加下さい！

時間の無い方は途中退席もOK（会費は同額オネガイシマス）

来週から参加不参加を聴きますので、ぜひ、みなさん調整してね！

